

京都大学若手人材海外派遣事業 スーパージョン万プログラム  
研究者派遣プログラム

成果報告書

提出日：平成 27 年 9 月 25 日

1. 渡航者

氏名	高橋 由光	採択年度	平成 26 年度
部局	医学研究科 健康情報学分野	電話	
職名	講師	メール	
研究課題名	多疾患罹患における受診行動の実態および要因解明：社会的ネットワーク分析		
海外渡航期間	平成 26 年 8 月 20 日～平成 27 年 8 月 19 日		

2. 渡航に関する情報

渡航先	国名：アメリカ合衆国 大学等研究機関名：ハーバード公衆衛生大学院 研究室名等：社会行動科学 受入研究者名：Ichiro Kawachi
渡航期間中の出張  (渡航期間中に一時帰国や学会参加等の目的で短期の出張があった場合、その目的、行き先、期間を報告して下さい。)  ※複数回に渡る場合、適宜行を追加して下さい。	出張先：イギリス・ケンブリッジ 目的：ケンブリッジ大 Dr. Kogan と情報交換および解析を実施 期間：2015/2/17-26  出張先：アメリカ合衆国・デンバー 目的：Society for Epidemiologic Research's 48th Annual Meeting にて発表および情報収集。 期間：2015/6/15-20

### 3. ジョン万プログラムによる成果

以下の項目について、渡航期間中の成果、または今後見込まれる成果を具体的にお書き下さい。ページ数については増加してもかまいません。

<p>国際共著論文の執筆  (論文の題名、雑誌名、共著者名、刊行予定等)</p>	<p>Takahashi Y, Ishizaki T, Nakayama T, Kawachi I. Social network analysis of duplicative prescriptions in Japan. 投稿中.</p> <p>Takahashi Y, Fujiwara T, Nakayama T, Kawachi I. Subjective social status and trajectories of self-rated health: Comparative analysis of Japan and the United States. 投稿中.</p> <p>Facebook and health (仮題). 原稿作成中.</p>
<p>更なる外部資金獲得に繋がる国際共同研究の立上げ/実施  (国際共同研究の内容、実施計画、応募予定の外部研究資金等)</p>	<p>渡航期間中に、英国ケンブリッジ大学ダウニング校の研究者を訪問した。Facebook 参加者 5000 万人のデータを収集しており、データの特徴および研究計画・解析について意見交換を実施した。社会的ネットワーク分析の方法論を吟味し、また、アウトカムとしての主観的健康感や幸福度について検討を行った。今後、米国ハーバード大学、英国ケンブリッジ大学との国際共同研究として継続させ、日本学術振興会の科学研究費にも申請をしていく予定である。</p>
<p>国際研究ネットワークの新規構築/深化  (参加した学会やその他の学術・交流組織、そこから構築/深化した研究ネットワークの内容等)</p>	<p>学会、研究会での発表</p> <p>Takahashi Y, Ishizaki T, Nakayama T, Kawachi I. Social network analysis of duplicative prescriptions in Japan. Society for Epidemiology Research 48th Annual Meeting, June 16-19, 2015, Denver, USA.</p> <p>Takahashi Y, Fujiwara T, Nakayama T, Kawachi I. Subjective social class and trajectories of self-perceived health status: Comparative analysis of Japan and the USA. 11th Annual Junior Investigators' Health Disparities Research Poster Session. May 7, 2015, Boston, USA.</p> <p>Takahashi Y, Tsuboya T, Hikichi H, Kawachi I. Self-rated health and mental health in Japan. Swiss Re/Harvard Chan School of Public Health Workshop - Mind, Brain, and Behaviour. May 4-15, 2015. Cambridge, USA.</p> <p>その他</p> <p>ボストンには、ハーバード大だけでなく、MIT、タフツ大、ボストン大など大学が多く、著名な研究者によるセミナーや勉強会が多く開催されていた。マサチューセッツ総合病院、ベスイスラエルディーコネス・メディカルセンター、ブリガムアンドウィメンズ病院などの若手研究者との定期的な勉強会などにも参加し、臨床研究・疫学研究を中心とした研究ネットワークを構築し、発表も行った。また、社会疫学で著名な英国 UCL 疫学・公衆衛生の研究者とも意見交換を行った。</p>

<p>在外研究経験 による研鑽</p> <p>(渡航先機関で得た 研究の展開方法、研究 室の運営方法、教育方 針・人材育成方法等)</p>	<p>研究室には、アジア、ヨーロッパ、南米など世界各国から、様々なバックグラウンドの研究者が集まっていた。社会疫学という分野横断的な分野であったため、医療系のみならず、心理、経済などをバックグラウンドとしてもつ研究者もいた。異なる分野の知見を取り込むことで既存の分野が大きく前進する可能性や新たな領域の創成について、強く意識するようになった。ポスドクに対しては、研究するために充実した個人スペースが用意されており、独立した研究者として、研究を遂行するためのインフラが整備されていた。定期的な研究室ミーティングや、PI・メンターとの面談も行われた。同時に、フロア内での交流を図るために、研究者が自由に使える共有スペースや会議室も充実しており、フロア内でソーシャルイベントも実施されていた。「研究室」という枠を超えた研究者同士の交流も盛んであった。</p> <p>Takemi fellowship program の研究者との交流も定期的に行い、「重複処方」「重複疾患」について諸外国の状況含め情報交換を行った。また、プレゼンテーション、コミュニケーション向上目的としたプログラムにおいても、研究進捗を複数回プレゼンテーションすることで、異分野交流について多くのことを学んだ。</p> <p>また、学会運営、研究室メンバー応募や選定、学位審査についても経験することができたが、物理的な距離や時間調整が律速にならないよう、正式なインタビューなどにおいても Skype などを積極的に活用していた。</p>
<p>フィールド研究 の進展</p> <p>(渡航先国で実施した 実地調査や文献調査 等の内容)</p>	<p>本研究でフィールド研究は実施していない。しかしながら、世界的に著名なコホート研究であるフラミンガム心臓研究の研究施設を訪問する機会を得ることができた。現在、日本において関わっている、ながはま0次予防コホート事業の運営において非常に参考になった。</p>